

「夢十夜」第三夜と「異人殺し」

——近代小説と異界(二)——

堀 竜 一

I 第三夜と「こんな晩」

I・1 「こんな晩」の構造

夏目漱石「夢十夜」第三夜に関連して、平川祐弘は小泉八雲が収集・再話した出雲の民話の漱石への影響を示唆した。

それに対し、野村純一は、この種の民話が「こんな晩」、あるいは「六部殺し」と呼ばれる一つのタイプであることを、全国的に分布している多くの例証とともに指摘した。直接的影響関係という点では、「こんな晩」型説話(以下、「こんな晩」と略記)の第三夜への影響を立証することは困難だが、第三夜と「こんな晩」との類似は明瞭である。「こんな晩」の基本的な型は次のようなものである。

1、六部(ごほう・尼)が
(a)百姓家に泊まる。

- (b)渡し船に乗る。
- (c)旅の男と道連れになる。
- 2、六部が金を持つているのを知って(勘違され)殺す。
- 3、百姓はこの金をもとに金持ちになる。
- 4、子が生まれるが盲目あるいは口をきかない。
- 5、

(a)鯉を料理して切ると血の海になって子供が犯罪を暴露する。

(b)口をきかない子供がはじめてしゃべった言葉が「おれを殺した晩と同じだ」。

1、2、…、が話のストーリー展開であるのに対し、(a)、(b)、…、はバリエーションである。先に「類似」と言ったのは、おもに、盲目の子供が「おれを殺した晩と同じだ」と父親に犯罪を暴露する4、5の話の展開においてであるが、1

3の部分の展開についてはどうなのだろうか。

1→5の話の展開をひとまず、構造的に「1被殺害者の登場↓2被殺害者の殺害↓3殺害者の致富↓4子供の誕生↓5秘密の暴露」と抽象化しておこう。第三夜の場合、2の項は、話の末尾で「自分は此の言葉を聞くや否や、今から百年前文化五年辰年のこんな闇の晩に、此の杉の根で、一人の盲目を殺したと云ふ自覚が、忽然として頭の中に起つた」と、顕在化する。しかしそれは「自覚」のレベル(心理的レベル)においてであり、事実のレベルで語られる「こんな晩」の2とは異なる。この点については後述する。一見第三夜では1→3は欠落しているように見える。1→3はさらに抽象化すると、「2殺害↓3致富」と要約できる。2が成立するためには、かならず殺害者と被殺害者の両者が存在しなければならぬので、1は2に包含されるからである。したがって、第三夜は2↓3を欠落している、つまり「殺害の動機・行為↓殺害の結果」が不明であるということが出来る。もし、2↓3の話の展開を第三夜に組み込むとして、どのような「殺害の動機・行為↓殺害の結果」のバリエーションが可能なのだろうか。

1・2「異人殺し」と貨幣

この点に関して、小松和彦の「異人論」を参照することにしよう。小松は、「こんな晩」と類似の「異人殺し」伝承(以下、「異人殺し」と略記)の分析において、「こんな晩」を昔

話、「異人殺し」を伝説と位置づけながら、3致富のモチーフを、説話の原動力と捉えている。まず、村の中にある富者がいる。↓なぜ富者となつたかといへば、旅の者を殺害して、金品を強奪したからだ。この邂逅的説明が核になって、「異人殺し」伝承が形成されたというのである。「こんな晩」と「異人殺し」との相違点は、昔話と伝説との相違から類推されるように、「異人殺し」の固有名詞性、土地性、つまり歴史性と社会性にある。「異人殺し」は、ある土地の内部の特定の家と結びつけて語られる。これはどういうことだろうか。

ところが、「異人殺し」による説明には、はっきりと共同体に生じている家の盛衰が村落共同体の外部との社会関係によって、それも貨幣によって生じていることが語り込まれているのだ。外部からの力が、それも神霊ではなく、外部から侵入してくる貨幣が、村落共同体の旧来の社会秩序を脅かし変質させているのだということを、共同体自身がそれとなく悟っているのである。そして、村落共同体はこの新しい事態を前にして、それに賛意を表明するのではなく、それに対抗するために「異人殺し」伝説を新たに語り出したのであった。貨幣によって村落共同体が破壊されないために、貨幣を持ち込んで社会的・経済的に上昇した新しい家を排除しようという、悪意をたっぷり含んだフォークロアを、あの家は異人を殺して貨幣を強奪したのだという物語を、新たに作り出したというわけなのだ。

3 致富のモチーフの背景に、近世の貨幣経済の発達にともなつて、村落共同体に入り込んできた貨幣を村落共同体側が排除しようとするドラマを読み取ることに、「異人殺し」および「こんな晩」の構造は明瞭になる。「異人殺し」および「こんな晩」をさらに要約して、話の最大の眼目、つまり最小の物語を求めるとすれば、「2 殺害→5 暴露」ということになる。なぜなら、4 子供の誕生は、最終的な話の収束点である5 暴露の前提であるので、5 に包含されうるし、3 致富は、2 殺害の動機が金品目当ての場合についてのみ妥当し、他の動機のバリエーションには妥当しないため、2 殺害の動機に含めうるからである。

ところで、2 ↓ 5 は不可逆的前後関係である。つまり、秘密の暴露が生じるためには、秘密の発生が必要である。ところが、物語の論理においては、これはある種の解釈を含む因果関係である。ある出来事を結果とすると、それが起こった原因へと物語の想像力は遡及し、逆に記述のレベルでは、出来事は時間的に整序され、原因 ↓ 結果（論理的因果）の不可逆的物語として語り出される。2 ↓ 5 の場合、5（果） ↓ 2（因）は必然的に遡及するが、逆に2の側から因果論的に再構成する際に、「殺害 ↓ 秘密の隠蔽（隠滅）」という別のバリエーションが生じる可能性もある。2 ↓ 5 は、双方向的ではなく、5 ↓ 2 の遡及的力の方がはるかに強力であり、むしろ2 と強い結合力を持つのが、3 である。殺害の出来事は、なぜ殺害したのか（殺害の動機）、どのように殺害したのか（殺

害の行為）、殺害してどうなったか（殺害の結果）といった物語の論理に起因する疑問へと話を聞く者の想像力を導く。因果としての「（金品目当ての）殺害 → 致富」と、遡及としての「致富 ↓（金品目当ての）殺害」、この両者はごく自然に一組の物語として語られうる。とすれば、「こんな晩」の構造 II 最小の物語（最小の要約）は、「2 殺害 → 5 暴露」ではなく、話の核になる一組としての「2 殺害 → 3 致富」に、二次的に「5 暴露」が加わった。「2 殺害 → 3 致富」 ↓ 5 暴露」と考えることができる。

I・3 異人の告発

さらに小松は、「こんな晩」における子供の言動、「異人殺し」におけるシャーマンの役割に注目している。これは二つの点で興味深い。一つは告発という行為、告発者という役割である。「異人殺し」の場合、シャーマンによって、いままでも隠蔽・忘却されていた殺害行為（人・家）が新たに発見・同定され、祈禱によって、被害者は鎮魂され、殺害者（の家）は赦い清められる。バリエーションによっては、その家では異常な子供の誕生が続き、その家は没落、断絶してしまう。殺された異人がシャーマンに憑依したと考えれば、異人 II 被害者 II 告発者であり、シャーマンのお告げはそれ自体、まさしく仏教的因果応報思想の悪因果と考えられるだろう。「こんな晩」の子供もまた、身体的障害（盲目あるいは啞）という異形性から、異人であり、おそらく生まれ変わりとし

ての被殺者⇨告発者である。殺害者は因果の法則に従い、よりよって大切なかわい我が子の口を通して、自分の犯罪を暴かれることになる。告発者による告発は、殺害(悪事)はいずれ暴露されるという、日常の現実の背後に働く一種の因果応報的法則の可視化である。

もう一つ注目すべきは、告発の内容は事実そのもの(仮にそのようなものがあるとして)ではなく、逆に告発の内容が事実として認定されることになるということ。先程の小松の引用にあるような、「異人殺し」に内在する、村落共同体の側の排除の論理における悪意にシャーマンは敏感に感応し、それを理解可能な、誰もが納得できる物語として言語化する。この場合には、「いままで隠蔽・忘却されていた殺害行為(人・家)が新たに発見・同定され」というよりは、ある人物(家)に向けられる共同体の側の悪意を正当化するために、犯罪の物語が虚構化される。ここに浮かび上がる因果応報的法則は、発見・可視化された事実というよりは、現実をよりよく理解するために作り出された解釈とすべきである。それが事実として認定される。第三夜の場合、先に見たように、殺害は事実のレベルの出来事ではなく、あくまで何者かによって操作されたのかもしれない「自覚」のレベル(心理的レベル)の出来事である。第三夜には「殺害の動機・行為⇨殺害の結果(致富等)」は欠落しているが、秘密は暴露される。ここには、「異人殺し」のシャーマンのお告げに相当する機能が働いていると同時に、殺害行為の虚構化の可能

性が存在する。「こんな晩」の抽象化された構造にならって図示すれば、「5暴露⇨2殺害⇨3致富」ということになるだろう。お告げは、ある種の怨恨、復讐の念につき動かされている。とすれば、第三夜の深層には、貨幣にまつわる「殺害⇨致富」の構造と、それに端を発する怨恨の感情が隠蔽されているのかもしれない。

II 怪談の深層心理

II・1 近世末期の物語

永井荷風の「狐」は、明治新政府の高官である父親をはじめ男たちが、屋敷に現われた狐を退治する、「私」の幼年期の追憶譚である。前田愛はこの作品の構造を、父親⇨男社会⇨明治日本と、母親⇨女性⇨江戸文化の名残の二つの世界の対立から生み出されていると分析し、出来事として語られる狐退治は、女性⇨江戸原理が、男性⇨明治(近代日本)原理に取って代わられる時代状況を表現していると指摘している⁸⁾。

たしかにこの作品には二つの異質の世界の対立が見事に描かれているが、父親⇨明治日本に駆逐される狐が担う江戸的価値は、明に対する暗、公に対する私、進歩に対する過去という、母親に通う懐かしさ、優しさだけでなく、闇に対する畏怖でもあるはずである。時代は「丁度、西南戦争の後程もなく、世の中は、謀反人だの、刺客だの、強盗だのと、殺伐

残忍の話ばかり、少しく門構の大きい地位ある人の屋敷や、土蔵の蔽めしい商家の縁の下からは、夜陰に主人の寢息を伺つて、いつ脅迫暗殺の白刃が畳を貫いて閃き出るか計られぬと云ふやうな暗澹極まる疑念が、何処となしに時代の空気の中に漂つて居た頃、「丁度四歳の初冬の或る夕方」のこと、広い庭の「最も暗い木立の奥深いところに昔の屋敷跡の名残だといふ古井戸」の残りの一つが、出入りの植木屋の安吉の手で取り壊され、埋め立てられた。「これも恐ろしい数ある記念の一つである。蟻、やすで、むかで、げじぐ、み、ず、小蛇、地蟲、はさみ蟲、冬の住家に眠つて居たさまざまの蟲けらは、朽ちた井戸側の間から、ぞろぞろ、ぬるぬる、うごめき出し、木枯の寒い風にのたうち廻つて、その場に生白い腹を見せながら斃死くたはつてしまふのも多かつた」。ここでうごめき出し、のたうち廻つて、死んでしまうグロテスクな虫たちもやはり、明治の新時代には不要の、というよりは忌まわしい江戸時代の遺物なのではないだろうか。しかし江戸の遺物は物質的にはそのように破壊、淘汰できても、人々の記憶の中からは容易に消し去ることはできない。

「私は小学校へ行くほどの年齢になつても、伝通院の縁日で、からくりの画看板に見る皿屋敷のお菊殺し、乳母が読んで居る四谷怪談の絵草紙などに、古井戸ばかりか、丁度其の傍にある朽ちかけた柳の老木が、深い自然の約束となつて、夢にまで私をおびへさせた事が幾度だか知れなかつた」。この引用は『歡樂』所収本文によるが、『中学世界』明治四十

二年一月号初出本文では「四谷怪談」は「不知火物語しらぬひものがたり」である。「四谷怪談」とすることで、幼年の「私」の恐怖が明確に怪談と関連づけられることになる。諏訪春雄は「近世を代表する幽霊は累かさね、お菊、お岩の三人である。いずれも女性であり、男性から非道な扱を受けて亡霊となると、恐ろしい怨霊となつて崇りをなした。かの女たちの物語はくり返し、小説、講釈、演劇などに採りあげられてひろめられ、近世だけではない、日本の全時代を通じての代表的な幽霊となつてい」と言うが、たしかに明治の子である「私」の記憶にまで先の三人のうち二人の影は入り込んでいるのである。

II・2 夢と集合的無意識

笹淵友一や相原和邦は、第三夜と江戸怪談との類似点に着目して、鶴屋南北『東海道四谷怪談』、河竹黙阿弥『鳶紅葉字都合時』、三遊亭円朝『真景累ヶ淵』等の直接的、間接的、影響を指摘している。荷風は、幼年にとつての世界への入口が、近世的「小説、講釈、演劇」等の物語であつたことを、的確に描いている。世代が荷風よりひとまわり上である漱石の近世的世界への親近は、荷風以上に深層に及んでいたと想像される。個人が世界に対して眼を開かれる、すなわち自らの感性や言葉を形成、獲得するのは、同時代の感性や言葉と関わる幼少年期の生活環境や公的私的的教育によるのだとすれば、そしてそれらがそれに先行する時代の感性によって感じ取られ、先行する時代の言葉によって語り出されるのだとす

れば、明治維新の前年に生まれ、明治初年代に幼年期を送った漱石の獲得した感性や言葉は、たぶん近世末期の感性や言葉を内包していたと考えて差し支えないだろう。

ユング心理学は人間の無意識（意識下）の構造を、大きく、個人的無意識と集合的（普遍的）無意識の階層と想定している。集合的とは文化的共同体を意味している。ユング心理学はそのような文化的共同体の中で何世代にもわたって語り継がれてきた、昔話のようないわゆる口承文芸に、その文化的共同体の心^{メンタリティ}性の投影を読み取ろうとしてきた。日本の昔話について分析を試みたのが、河合隼雄である。個人的無意識が夢に投影されるとすれば、文化的共同体の集合的無意識は昔話に投影されるだろう。近世的「小説、講釈、演劇」等の中に取り込まれた怪談についても、ある種の集合的無意識の投影と見ることもできるはずである。もちろん、昔話は、語られる以上、集合的無意識そのものではなく、夢は、一種の叙述を伴う以上、個人的無意識そのものではないが、夢は昔話が読まれる（解釈される）ように、読まれうる（解釈されうる）だろう。「夢十夜」が夢そのものでないのはいまでもないが、その意味で「夢十夜」を夢や昔話や怪談と関連づけて読むとき、作品のある深層が見えてくるのではないだろうか。

Ⅱ・3 『死霊解脱物語聞書』と『盲目殺し』

先に挙げた『東海道四谷怪談』、『鳶紅葉宇都谷峠』、『真景

累ヶ淵』等は、広義には、いわゆる「盲目殺し」の話である。それと同時に、「こんな晩」「異人殺し」の「2殺害→3致富→5暴露」の構造と、それにまつわる怨恨の感情が物語の原動力の一つになっている点で共通性がある。『東海道四谷怪談』では、民谷伊右衛門は、財産目当てで、伊藤喜兵衛孫娘お梅を受け入れ、妻お岩は毒薬によって異様な形相に変えられてしまう。『鳶紅葉宇都谷峠』では、忠義者伊丹屋十兵衛が主人思いゆえに、金銭を必要として、同宿した盲人文弥を宇都谷峠で殺害してしまう。『真景累ヶ淵』の変転に富んだ物語は、高利貸・宗悦（＝盲人）の殺害から始まる。

これらと並んで、もう一つ注目したいのは、近世において、歌舞伎等を通じて、さまざまなバリエーションを生み出し（『真景累ヶ淵』もその一つ）、広く流布した「日本の全時代を通じての代表的な幽霊」の一人「累」の話である。累譚、あるいは累のモチーフは、古くは『死霊解脱物語聞書』に遡るとされる。『死霊解脱物語聞書』は以下のような話である。下総国岡田郡羽生村の百姓与右衛門の子菊に、先母累の死霊がつき、祐天上人の仏力により、累の死霊は解脱する。ところが菊は再び死霊に取り憑かれる。今度は、累の母親の連れ子助の死霊である。これも、祐天上人により成仏をする。先代の与右衛門が累の母親と結婚する際に、連れ子である助を殺させたのである。また入り婿であった今の与右衛門は、その助の生まれ変わりと思われる累の醜悪な容貌とねじれた心を憎んで、累を絹川（鬼怒川）で殺し、財産を奪ったのであ

る。

この累を主人公とする、幾重にも因縁のからまり合ったおどろおどろしい話を、高田衛は、祐天上人の側から光を当てて、詳細に検討している。累の悪霊の解脱、助の霊の成仏は、偉大な霊能者・祐天上人の功績を顕彰するために語られたという。祐天上人はこの「事件」の三十九年後、『死霊解脱物語聞書』出版の二十一年後に、江戸の浄土宗の総本山・芝の増上寺の住職になった人物である。

この祐天上人への注目を、先に取り上げた小松和彦『悪霊論』の視点から見てみるなら、祐天上人はまさしく「異人殺し」伝承におけるシャーマンの役割を担っている。祐天の出現により、累、助の悪霊が可視化され、先代与右衛門と当代与右衛門の殺害が暴露される。

『死霊解脱物語聞書』は、シャーマンの役割の点でたしかに、「異人殺し」および「こんな晩」とよく似た構造を持っている。しかしそれだけではない。当代与右衛門の累殺しは、累の精神的・肉体的醜悪さのゆえと言われるが、一方では、あきらかに累が相続した田畑、財産目当てである。先代与右衛門の助殺し（実際には、与右衛門が妻に殺させた）は、助の不具のためであるが、これもやはり農村の労働や生活における「足手まとい」、つまり反効率のためと考えられる。この元禄三年（一六九〇）刊行の『死霊解脱物語聞書』でもすでに貨幣的価値の問題が、事件の発端になっている。

Ⅲ 貨幣と悪

Ⅲ・1 貨幣と因果

第三夜に登場する「小僧」は幽霊だろうか。「小僧」がある種の怨恨によって、殺害者の隠蔽した秘密を暴露するため登場するのだとしたら、そう言えるかもしれない。たしかに、近世怪談の中にはある人物に怨恨を抱いたまま死んで幽霊になった人物が、ある人物の子供に生まれ変わるなどして祟る話は、特に因果話として一群を形成している。『善悪報ばなし』、『片仮名本・因果物語』、『平仮名本・因果物語』といった怪談集は代表的なものであるが、その他の怪談集にもその類の話が歴大にあるのは言うまでもない。

高田衛は、近世怪談が内容的に、唱導仏教系怪談、中国小説系怪談、民俗系怪談の三つの分野に分類されるとし、それは「江戸時代初期の人々の心の深層にあつて、再発見していった異界の三つの分野を示唆している」と言う¹⁶。この指摘は興味深いが、「異界」と「他界」を明確に区別する諏訪春雄『日本の幽霊』の定義づけによれば、これは正しくない。諏訪春雄は、妖怪はたそがれ時やかわたれ時にある特定の場所、不特定の者に対して出現し、幽霊は丑三時に出現し、恨みを抱いたある特定の人物をどこまでも追いかけるという、柳田国男の古典的な妖怪と幽霊の区分を修正して次のように分類する。「異界」は人間の日常生活を内とした場合の外（または

周縁)なる空間である。内の日常世界の円の外側の同心円の領域に存在するのが妖怪である。「妖怪は、しばしばその異界性ともいべき超自然力や怪異性を失って現世の秩序に組み込まれてしまうことがある」。これに対して、「他界」はこの世に対するあの世、此岸に対する彼岸」という時間的・空間的な固定的關係概念である。死者のおもむく先に幽霊は存在し、ときにそこから現世へと戻ってくる。歴史的には幽霊は、定着農耕の祖霊信仰から派生している。幽霊は本質的に回帰的存在なのである。

そのような観点から見れば、唱導仏教系怪談、中国小説系怪談、民俗系怪談のうち、「異界」が関わるのは、民俗系怪談であり、ここには異形の者たち、すなわち異人たちが登場する。唱導仏教系怪談では、「他界」から現世に到来する幽霊が描かれるが、幽霊の回帰性は仏教的因果のテーマと関連する。第三夜の「小僧」の場合、父親に殺された人物の転生だとすれば、言うまでもなく幽霊である。しかし、小僧Ⅱ異人だとすれば、日常世界の周縁(あるいは外部)から日常世界に入り込む妖怪とも言えるだろう。この点に関しては、後述する。

ところで幽霊の出現の記述は、「異人殺し」の発見的方法と同型である。つまり、まず幽霊が出現する↓幽霊が対象とする人物が画定される↓恨まれることになったその人物の悪事が暴かれる。これは、幽霊が回帰する動機である怨恨・怨念・執着といった強い情念をあぶり出すと同時に、必然的に

因果という關係性を構成することになる。因果は、果から因に遡って関連づけられ、記述の際には因果として整序される、と先に述べたが、第三夜は果(現在)から因(百年前の殺人)を導き出している。しかし、「殺害の動機↓殺害の結果」は隠蔽されたままである。果から因に遡った因果の論理の糸は、さらに、因Ⅱ前段階の果↓前段階の因Ⅱ前前段階の果↓…として第一の因にまで遡ろうとするだろう。「こんな晩」、「異人殺し」、累譚等はこのように貨幣の存在を描き出している。貨幣と悪のテーマは、第三夜の場合、無縁なのだろうか。

Ⅲ・2 影と根元悪

ユング心理学者の秋山さと子は第三夜の「小僧」を、漱石個人を超えた「人類に普遍的に存在する無意識の暗さ」(「原罪感」罪障感)Ⅱ「根元悪」を象徴する元型としての影と解釈している。「原罪」については、「夢十夜」、特に第三夜の解釈史における、伊藤整や荒正人の「原罪」説とからんで、たぶんに議論の余地が残るが、集合的無意識の領域の根元的な罪Ⅱ悪という解釈は、示唆的である。

「小僧」の幽霊性は回帰性にある。秘密の暴露はこれによってもたらされる。それに対して、妖怪性は異人性にある。罪Ⅱ暗黒はここから生じている。異人は漂泊的性格を持ち、共同体に非(反)共同体的論理を持ち込む。共同体から見れば、それは規範から外れた論理であり、悪に通じうる。あるいは共同体の中心的論理Ⅱ秩序から疎外、排除されたものが

周縁および外部の混沌^{カオス}に蓄積され、暴力として、共同体に不安、脅威を与える。意識の領域においては、意識の表層を支配するのは理性である。これは秩序の世界である。それに対して、意識の深層には表層から追いやられた情念が、不可触な暗黒^{コグニチ}混沌として密封される。そこに悪、暴力は存在する。それは貨幣・商人と結びつく。

いづれにせよ、商業は共同体にとつては本質的に外部性を刻印されている。あらゆる〈交通〉の形態がそうであるように、商業は閉ざされた世界の基底にむけた反措定であり、外部を背負った侵略者である。それは不可避免的に、共同体の日常、その自明性や絶対性を鋭くおびやかす。そのにない手が、例外なしに罪・穢れ・病いなどの位相で表象されてきたのは、こうした商業のもつ外部性⁽²⁾のためである。

漱石の文学の重要なモチーフである金銭(貨幣)は、意識の深層においては影^{シヤドウ}とつながりを持つ。理性^{コグニチ}秩序の支配は、一種の進歩である。暗黒^{カク}混沌の跋扈は、一種の退歩である。新しい時代は常に古い時代をアンチテーゼとして、克服、乗り越えなければならぬ。古い時代は抑圧される。第三夜を貨幣殺しとしての異人殺しと捉えたとすれば、それは、地縁・血縁といった関係から人間を切り離した明治^{コグニチ}近代という時代が抑圧し、切り捨てたものによって、明治^{コグニチ}近代が復讐されることを意味しているのかもしれない。

『真景累ヶ淵』は被殺害者の幽霊という近世的(反近代)的

存在を、殺害者の恐怖心^{コウ}神経という近代的心理主義に還元して説明しようとする。しかし、それにもかかわらず、物語を展開してゆく実質的な原動力は、いたるところに張りめぐらされた因果の糸という前近代的力学なのである。

「趣味の遺伝」で、「遺伝」という近代科学主義の学説を援用して立てられる「趣味^{コウ}恋愛の遺伝」という仮説は、しかし、むしろ仏教的因縁と言うべきだろう。近代は闇の暗黒をけつして克服したわけでも、無力化したわけでもない。いったい近代人はどこまで深く深層に降りて行くことができるのだろうか。

注

(1) 『知られぬ日本の面影』「日本海に沿って」。

(2) 『小泉八雲 西洋脱出の夢』第二章「子供を捨てた父——ハーンの民話と漱石の『夢十夜』」(一九八一・一、新潮社)。

(3) 「世間話と『こんな晩』」(野村純一『昔話伝承の研究』、一九八四・七、同朋社出版)、および「昔話と民族社会」(野村純一編『日本昔話研究集成』第三卷「昔話と民俗」、一九八四・八、名著出版)。

(4) 関敬吾・野村純一・大島廣志『日本昔話大成』第11巻「資料篇」(一九八〇・九、角川書店)の「昔話の型」の本格新三三「こんな晩(AT九六〇)」のうちBの話型。Aの話型は以下のとおり。1、(a)男が地蔵の前で人を殺す。(b)物を盗んで地蔵の前を通る(休む)。2、男は地

蔵にこのことは他言するなという。4、(a)後日、地蔵のところで一緒にいた人に地蔵がしゃべったことを話す。

どうしゃべったかと聞かれて人殺しのことも話す。話した相手に的とわかって殺される(捕まる)。(b)地蔵がしゃべると人に話し、盗みをみずから話して捕まる。今回はBの話型とAの話型の相違に関しては触れない。

(5) 『異人論 民俗社会の心性』(一九八五・七、青土社)、および『悪霊論 異界からのメッセージ』(一九八九・一〇、青土社)。

(6) ただし、「異人殺し」伝承が、抽象化されて、つまり固有名詞性を失って、「こんな晩」型説話になったのか、「こんな晩」型説話が増殖して、あるいは現実社会に適用されて、「異人殺し」伝承になったのかは、小松の論からは推論できないが、ここでは問題にしない。

(7) 『悪霊論』p. 62。
(8) 『都市空間のなかの文学』「廃園の精霊―『狐』」(一九八二・一二、筑摩書房)。

(9) 『日本の幽霊』(一九八八・七、岩波新書) p. 188。
(10) 笹淵友一『夏目漱石論―『夢十夜』論ほか』(一九八六・二、明治書院)、相原和邦『漱石文学の研究―表現を軸として』(一九八八・二、明治書院 第四部第一章)。

(11) とくに、『昔話と日本人の心』(一九八二・二、岩波書店) 参照。その他、『夢と昔話の深層心理』(一九八二・七、小学館創造選書) 等参照。

(12) 夢をみる・書く・読むの夢の文法については、フロイトの夢理論によるものだが、久米博『夢の解釈学』(一九八二・三、北斗出版)を参照。

(13) 影印本として『愛媛大学古典叢刊』13「死霊解脱物語 聞書」(一九六三・一)がある。本文は服部幸雄『変化論』(一九七五・六、平凡社選書)に翻刻されたが、のちに高田衛代表校訂『近世奇談集成「二」』(一九九二・一二、国書刊行会)にも収録された。なお、近世における累のモチーフの展開についての概要は、藤村作編『増補改訂日本文学大辞典』第一卷(一九五〇・二、新潮社)「累かさね」の項(秋葉芳美・執筆)、服部幸雄『変化論』所収「累曼荼羅」参照。

(14) 『江戸の悪霊祓い師』(一九九一・一、筑摩書房)。後に改訂され、『新編 江戸の悪霊祓い師』(一九九四・一一、ちくま学芸文庫)として刊行。

(15) 今日容易に見られる、近世怪談を活字化したものとして、高田衛編・校注『江戸怪談集』上・中・下(一九八九・一、四、六、岩波文庫)を初め、太刀川清校訂『叢書江戸文庫』2「百物語怪談集成」(一九八七・七、国書刊行会)、同『同』27「続百物語怪談集成」(一九九三・九、国書刊行会)、笹川種郎解題『近代日本文学大系』第十三卷「怪異小説集」(一九二七・五、国民図書)、山口剛解説『日本名著全集』江戸文芸之部第十卷「怪談名作集」(一九二七・一〇、日本名著全集刊行会)、『徳川

文芸類聚」第四「怪談小説」(一九七〇・九、国書刊行会)等がある。

(16) 高田衛編・校注『江戸怪談集』中「解説」、p.403。

(17) 『妖怪談義』(一九五六・一二、修道社)。

(18) 『日本の幽霊』(前掲(9)) I、II 参照

(19) 『夢診断』(一九八一・四、講談社現代新書)、p.116-121。

(20) 「夢十夜」および第三夜の解釈史の原点になった、伊藤整「夏目漱石」(『現代日本小説大系』第十六卷「解説」、一九四九・五、河出書房) および荒正人「漱石の暗い部分」(『近代文学』一九五三・一二)のみ挙げておく。

(21) 以上の要約については、赤坂憲雄『異人論序説』(一九九二・八、ちくま学芸文庫。もと、一九八五・一二、砂子屋書房刊) 参照。

(22) 前掲(21)赤坂憲雄『異人論序説』、p.59。

(23) 延広真治「三遊亭円朝『真景累ヶ淵』」(『国文学』一九九二・八)は、簡略だが、明治期の講談における「神経」のモチーフに注目して興味深い。なお、明治期の講談等大衆芸能の語りを見ると、祐天上人を扱ったものが数多く見られ、「累」のモチーフの歴史の変遷を辿ることができると思われるが、ここではこれ以上立ち入らない。

(新潟大学教育学部)

受贈雑誌・図書目録(平成六年三年以降(三))

米沢国語国文学 第22号

国語国文学 第16号(弘前大学国語国文学会)

筑波中国文化論叢 14

国語教育研究 第37・38号(広島大学光葉会)

国語表現研究 第7号(大阪教育大学国語表現研究会)

学大国文 第38号(大阪教育大学国語国文学研究会)

広島女学院大学日本文学 第4号

東北大学文学部日本語学科論集 第4号

信大国語教育 第4号

山口国語教育研究 第4号

日本文学研究年誌 第4号(金沢女子大学日本文学研究室)

国文学研究資料館蔵マイクログ資料目録 一九九四年

国文学研究資料館蔵逐次刊行物目録 一九九四年

高大国語教育 第42号

人文科教育研究 第21集(筑波大学人文科教育学会)

富山大学国語教育 第19号

奈良大学紀要(国文学研究室編) 第22号

日本文学研究 第30号(梅光女学院大学日本文学会)